Interview with

Sayo Nagase

interview&text: **Yoshiko Kurata**

永瀬沙世、写真家。
ピンクとイエローの２色が重なり合う彼女独特の写真。
女の子だけではなく給水塔や各国の風景などさまざまな対象を撮る姿勢が、
次は彼女がなにに興味を持つのかこちらをワクワクさせる。
写真家の認識について、国内外で写真集を出版するにあたっての
違いなどを聞いてみた。

『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』（Yomogi Books）2014

カメラをはじめたきっかけを教えてください。

15、16歳の頃からとても独立心旺盛だったので、いろいろな仕事を探していたんです。なにが適切なのか考えたときに、自分のなかですごく興味のある分野だと音楽、雑誌、アートあたりだと思いました。でも、ヴィジュアル全般か音楽全般かって考えたとき、写真、動画、絵、ギター、歌などいろいろあるじゃないですか。それで全部やってみたんです。ビデオ撮ったり、テープに歌吹き込んだり、ギター買ってデモテープ作ってみたり。結局いろいろやったけど、頑張っても身に付かないものは苦しくなっちゃって、やっぱり楽しいものがいいなと思いました。それで感覚的にカチッときたのもあると思うけど、写真にいきつきました。

10代にしては、やりすぎな気がしますが(笑)。
では、15歳のときからずっと写真を撮っているんですか。

でも写真家以外にも写真に関わる仕事だと、パブリッシャー、アートディレクター、モデル、ギャラリー、編集者、スタジオ等々いろいろあるじゃないですか。それから、またどれが好きなのか、いろいろやっているうちに最終的に撮るのが好きだなって思ったんです。

最初はスタジオで働いたりもしましたか?

スタジオには入りましたね。写真が当時ブームになっていたので、それだったら追求する方が好きだなと感じました。ただ感覚でやって、いまの若い自分のイマジネーションを見せるっていうのには、そこまで惹かれなかったんです。作りたいものに近づくために表現の幅が広い方が引き出しが増えるから、もうちょっと技術的なことを勉強したいなと思いはじめました。なので、自分で勉強した後に商業スタジオではなく、自由に機材を勉強できるような小さいところに入って一生懸命勉強しました。コンパクトカメラでセンスがいい写真撮れても、他のいろいろなヴィジュアルを見ると、こういうのも撮りたいなという欲が出てきたんです。

その後、写真集『PINK LEMONADE』の由来にもなったマゼンダとイエローを混ぜる独特の手法を見つけたのは、いつですか。

さまざまな色を出していったときに、これがいいなって本当に感覚的に見つけました。フィルムで撮ってるから、なおさらアナログであまり意識せずに色の3原色を暗室作業していました。でも、数年前にデジタルカメラで撮影したときに改めて気づいたんです。フォトショップを使ったときに、トーンカーブを調節しながら「あれ私が好きな色っていままでどうやって作ってたのかな」と考えてもなかなか出てこなかったんです。そこで色を変えるのではなく、写真に載せていくことで、いままでの色が出ると気づいたんです。なので感覚的にやってきたことを、デジタルカメラを使ったことで改めて意識するようになりました。

改めて気づいてから、自分のなかで変化とかはありましたか。

3原色あるのに、2個のバランスで変わるのって哲学的だなと感じました。相反するもの、真逆なものを重ねるって面白いと感じて、そういうコンセプトでずっとやりたいなと思いました。例えば、甘いけど苦いみたいな、矛盾しているものが同居する瞬間ってないですか?この2色に限らず、そういう矛盾してるものを混ぜちゃうのが好きなんです。それをたまたまわかりやすい言葉にしたのが、ピンクと黄色。でも『PINK AND YELLOW』だと情緒に欠けるなって考えてたときに、ロケ地のハワイのカフェでPINK LEMONADE ってメニューをよく見た記憶からパッと思いつきましたね。

ストックホルムの出版社『LIBRARYMAN』から出したそうですが、出会ったきっかけはなんですか。

イギリス人のオーナーが経営しているニューヨークの本屋「Dashwood books」に1冊目の写真集が置かれていたんです。その本屋で出版社の方が偶然買ってくれて、連絡がきました。出版社は男女2人で運営していたんですが、男性がニューヨークで購入、そして同時期に女性がベルギーで購入したみたいで、旅行後にお互い驚いて、メールを送って下さったみたいです。でも私がそのメールに気づいたのは、パソコンを捨ててバックアップ取るとき、つまり1年後くらいに気づいて慌ててメールしましたね(笑)。

言語が違うとさまざまな点で違う所があると思いますが、海外と日本の出版社に違いを感じましたか?

ストックホルムから出版するまで、日本の出版社に何度も作品を持って行ってたけど、なかなか上手くいかなくて分析もしました。でも、そこまで両方の出版社と関わったことはないので比べるのは難しいですね。海外とやりやすいと感じたのは、言葉が先ではなかったことです。日本の出版社に作品を見せにいったときに、写真を見る前に制作過程、経歴、年齢などいろいろ人となりを聞かれたんです。でも、海外って作品がすべて。みんな聞かれたら答えられるけど、言葉は二の次。例えば、セルフパブリッシング『WATER TOWER』を出した際にもそれは感じました。セルフパブリッシングなので海外に流通できなくて、ロンドンの本屋に聞いて、流通をやっている会社に会いに行ったんです。そこで写真集渡したら、私に見向きもせずに「これはベルリン?」など本当に作品しか興味がなくて。それがすごくいいなと思ったし、とてもシンプルじゃないですか。もし、これを撮ったひとが若手でもおじいちゃんでも関係なくて、作品がよければ扱うみたいなところがかっこよかったです。

日本なら写真以外の部分、その後にメディアに出やすいとか、売れやすいかとかを重要視してますもんね。

逆に海外はその分厳しいとは思います。でも、作品至上主義っていいなと思いますね。とてもセンセーショナル

1,2.『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』(Yomogi Books) 2014
3.『White Flowers』(twelvebooks & Yomogi Books) 2012

1.

2.

3.

ですごく勉強になる体験でした。かといって、日本でもボーダレスな方はたくさんいますし、最終的に自分に合う方法で一緒に制作できたらなと思います。いままで海外、日本、自分から写真集を出しきたので、型にはまりたくないとは思ってます。

最近出した写真集『FOLLOW UP 追跡 –J002E3-』はさまざまな国をまわって撮影したと聞きましたが、『PINK LEMONADE』とは違う印象を受けました。

そうですね。いろいろな国をまわりましたが、セレクトするときに場所を特定させないようにはしました。そして、自分自身も忘れるようにしたので、逆にそれがうまくいったのかなと思ってます。結局、場所って人間が勝手にラベリングしただけじゃないですか。でも場所と年代はすごい情報やキーワードになりがちで、人間が先入観で入っちゃう。だから今回のコンセプトでは、ここがどこかわからないようにしたいなと思って、標識とか排除したつもりです。例えばこの写真集に限らず、『PINK LEMONADE』も表紙が「中目黒で撮った写真」といわれたら、感じ方が変わりますよね。でも「ストックホルムの出版社から出して、遠い街で撮影したんだよ！（本当は中目黒だけど）」と見る人が感じると、イマジネーションがあってすごく面白い。だから、日本から出版したときは海外の写真、海外から出版したときは日本の写真を使うようにしていたこともあります。結局マゼンダとイエローみたいに矛盾したものを混ぜるというのは、ここにも繋がってきています。

写真集を出す一方で、ファッション雑誌ともお仕事されてますが、仕事をする際に気持ちや意識の違いってありますか？

雑誌の仕事は、いろいろな写真が撮れるようになったからこそコラボレーションだと考えています。社会と時代と繋がっているって気持ちなのかもしれない。結果的にテーマが写真から出ればいいかな、と思っています。逆に写真集ではいちから自分でおこなっているからコラボレーションでもないし、感覚的にやっているから社会も見てないです（笑）。でも、雑誌で撮影するときは、先方の想定内の安全圏よりいつもギリギリまで攻めるように撮影してます。

怒られそう（笑）。でも、写真集と雑誌両方で活動することにも意味がありそうですよね。

写真集でわがままできている分、社会と関わってコミュニーションをとることができるのが雑誌だと思っています。なので、結果相乗効果を生んでいます。自分はちょっとコンクリートとか、そういう人間の手垢が付いたものが好きなので、やっぱり社会と繋がってやってる方がいまはいいのかな。山に篭って、昆虫だけ撮るのも面白そうだけど、それはおばあちゃんになってからでいいかなと思います（笑）。

でも、永瀬さんの写真ってどちらかというとファッションとか流行ではないと思いますが、写真自体では写真集と雑誌での違いってありますか？

雑誌は時代の流れを反映させなきゃいけなくて、一方で写真集は時代の流れを全然反映させてないんです。だから、たぶん撮ってるのは一緒で、服とモデル、場所、スタッフ、空気が変わってるだけだと思ってます。

撮影のとき、モデルがカメラを意識していない瞬間をカメラに収めていた気がするんですが、どういう瞬間でシャッターを切ることが多いですか？

カメラを意識してもいいんだけど、モデルが「こう撮られたい」と思ってる自意識が表に出すぎる瞬間ってあるじゃないですか。あのときはあんまり切らないかな。撮らないというより興味が湧かないんです。でも目線が合ったり、カメラを意識してるときは撮ります。だから意識している、していないではなく、自意識にとても左右されるのかもしれない。例えば、音楽でいうと、楽譜にある音符の間を取りたいみたいな。瞬間と瞬間の間を撮りたいと思ってます。

勉強していたときに、影響されたアーティストがいたら教えてください。

当時は20代で皆が知らないものを知りたいって欲が強かったので、写真を見るっていうより、写真じゃない表現者の作品に興味がありました。若かったから、年齢が近い人だと自分が影響されすぎちゃいそうと思って怖かったので、なるべく自分から遠い人を真似しようと思ったんです。例えば、リヒター、ピカソ、オキーフ、モネとかの言葉、伝記本は読みましたね。伝記って表面的なことじゃなくて、どう生きたかっていうのを知れるからすごくためになりました。

20代のうちに流行ってるものだけに影響されているより、技術と年をとっても為になる言葉とかをインプットした方がよさそうですね。

きれいなのではなく、美しいというのが好きです。あと、本当に自分が表現したいものが写真として撮れるようになるって結構難しいと思います。

コツコツと勉強して写真集を出すなかで、節目の年ってありましたか？

2006年、26歳のときかな、すごい節目だった。ただ写真が好きで撮っていたのが、なんで撮っているんだろうと考えるきっかけになりましたね。1冊目の写真集『青の時間』を出版して、同時にどういう理由で作ったのか、どういう気持ちで撮ったのかといろいろ聞かれたんです。そんなこと生きてきたなかで1回もいわれたことなかったから、「え？」と思って答えてるうちに自分の考えが整理されていきました。直感で作ったものをインタビューで聞かれるから分析できるし、面白いと思いました。それが大きいきっかけだったかな。

初めていろいろとインタビューされるなかで、印象に残ったこととかありましたか？

すごくショッキングだったのが、雑誌

『Water Tower』（Yomogi Books刊）2011

『PINK LEMONADE』（スウェーデン、Libraryman）2013

『ASPHALT&CHALK』（スウェーデン、Libraryman）2011

の仕事もしている一方で若い年齢で写真集を出したので、出版社の人に「こういうテーマを撮ってきて、といわれて撮ったの？」って聞かれたことですね。雑誌だと雑誌側がストーリーなど考えるので、誰かにロケ地を決めてもらって作ったのかと思われてしまって。ゼロから自分ですべて企画と撮影したので、すごく反論しました(笑)。

**写真集の概念が日本だと
あまり知られてなかったんですかね。**

でも、業界じゃない本当に写真が好きな人たちはわかってくれました。それを体験したのがすごく若いときだったので「なんだよ。見くびられてるんだ」と思って、すごく燃えて、その後自分でアーティストブックを出版したんです(笑)。

**すごく正直な答え(笑)。
自費出版『WATER TOWER』を
発行したのは、いつ頃ですか。**

震災の年だから、2011年。印刷所は京都だったから止まらなかったけど、写真展を中止にするかどうか考えました。結局、水道、電気を使わずいろいろ工夫しながらやったら、たくさんの方が来てくださったので、開催してすごくよかったと思いました。皆仕事がストップして、テレビを観ても悲しいから、ちょっとアートを観にいこうみたいなのが嬉しかったです。

**自費出版するまでに繋がるくらい
26歳での経験は大きかったんですね。
自分の気持ちとか感情の変化が
作品に出ることはありますか？**

感情の変化で撮らないので、作品には影響しないですね。影響されてるのは、自分の物の見方。例えば『PINK LEMONADE』で、矛盾するものをあえて一緒にして表現するっていいましたが、これも感情じゃなくてどう見てるかってことです。あと、ここらへんから自分に興味がなくなったのかもしれないです。

**それまでは自分に興味があったと
いうことですか？**

自分自分だった気がする。自分ってものに比重を置いてたから、自分がコントロールしたい気持ちがありましたね。その後は、作品に興味が移りました。あと、それまでは自分を若干被写体に投影していたと思います。鏡を見ているような感じだったんじゃないかな。でも、『PINK LEMONADE』からは被写体に自分を投影しませんでした。

**被写体が自分とちょっと離れてるもの
でも気にならなくなった、
ということですかね。**

そうだと思います。『WATER TOWER』では給水塔に憧れを感じていました。このときは、自分のなかで1冊目から時間が空いたので、どうしていいかわからないと考えていたんだと思います。そんなときに、どーんと大地に立っている揺るぎないものってかっこいいなと思いました。例えば、アフリカのサバンナに行って長老が大きい樹木の麓で座ってるみたいな。だから、撮り方にしてもこの作品は、周りから回って見て撮っているのに対して、『ASPHALT&CHALK』は自分が止まって相手が勝手に動いてるだけ。なにか変化が起きたんだろうなと思います。

**自分のなかにあるものと少し
繋がって制作しているんですね。**

そうです。なので、揺るぎないものに惹かれていたのに『WATER TOWER』を出した後は、興味なくなったので写真集を出すたびに消化されていきます。次は、アーティストブック寄りの写真集を速いスパンで出版できたらなと思ってます。

**速い頻度でテーマを出していくのは
大変そうですが。**

意外と私は平気な人で、パッと作成できるんですが、その後売ったり営業するのが下手です。『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』もまだ代官山蔦屋でしか置かれてないので、やっとこの前VACANTに営業したところです。誰か私の代わりに担当者がいたらいいけど、システムがあまりないから、なかなかまわらないと思っています(笑)。

**海外ではニューヨーク、ロンドンなどで
置かれていますが、
システムが違うんですか？**

海外はディストリビューションというシステムがあって、その人たちが大量に買ってくれて、その後勝手に営業してくれるんです。でも、日本は自分で手売り。単価が安い場合、掛け率によっては書店に置いたら収入が少なくなる可能性もあるから、そういうビジネスがないんだと思います。一方、海外はアートブックって日本よりメジャーだから、ビジネスになってるのかも。

**フォトグラファーではないですが、
友人のファッションデザイナーも
海外で販売すると、昔よりある程度
ファンが増えたし、海外アーティストも
着用してくれたりするんだけど、
そこからさらに広がるってことが
難しいっていってました。
もし店舗が地方に増えたとしても、
交通費とかよりも、できるだけ自分の目
で確認したいから受注会のときも
店頭にわざわざ行ってしまう。
でも、ものを作ってる人って作品にエ
ネルギー全部をつぎ込んでるから、
他の部分が苦手であたりまえだと
思いますけどね。**

すごくわかります。今回も前回も東京以外で写真展をやりたかったけど、同じような理由で無理でした。私も表に出るのが苦手なので難しいなと思っているところです。でも、作品を広げることにエネルギーを費やすとものを作る時間がなくなってしまう。だからこそ、写真集を出してもアートブックショップとかに行く人は少ないから、写真展はやった方がいいと思ってます。

**イベントとかはInstagramで拡散
されやすいですもんね。一方で、現場に
行かずインターネットでイメージを**

©Sayo Nagase

消化できる時代にもなってますよね。

そうですね。写真をコピーしたりするのってまわりで流行ってますか？

最近はフィルムが流行ってるから、なんとなくはじめている子はいますけどね。永瀬さんの時代でもありましたか？

たぶん、私の時代はポラとかチェキじゃないかな。

でも写真って顕著に出る気がします。フィルムならぶらして被写体撮ってみるみたいな。だからこそ、永瀬さんが感覚的ではあるけど、自分の独自のスタイルを確立した過程に興味があります。いまは情報が多いからこそ、流されやすくて簡単に物事をはじめられるじゃないですか。

いってる意味わかります。72dpiで受け取る前提でいるのかもしれないですね。私は消費者だけの人生でありたくないっていうのがあって、なにか作るとか生む方が楽しいと思います。時代を反映するというのは好きだけど、表面的な流行にはあまり興味がないのかもしれないです。

だからこそ、なにっぽいっていわれたこともなさそうですよね。

ないですね。「どこのジャンルに入れればいいのかわからないから、ごめんなさい」って出版社に断られることが最初は多かったです。

コンテンポラリーアートとかもそうですよね。海外雑誌が写真を判別する機会に多く触れてる一方で、日本では機会が少ないから判断できる人も少ないのかなとも思います。それで消費者の前にどんどんわかりやすいものが出てくるようになると、それ以外は売れる対象にならないというか。

20代の前半はそういう人たちに「わかってたまるか」と思って作ってたときもありました。

もし「可愛い女の子を撮る人です！」って前面に出したらわかりやすいし、ファッション雑誌に取り上げられる対象になると思いますけど、そうじゃないですもんね。すると相手もどう見たり、どう取り上げればいいのか困惑するし。

でも、結局当事者って客観的な視点がわからないですよね。一時期、犬猫か可愛い女の子の写真が流行っていたので、簡単に説明がつかないと嫌だっていわれたことがありました。そのときに『WATER TOWER』、給水塔を撮った写真集を出したんです。

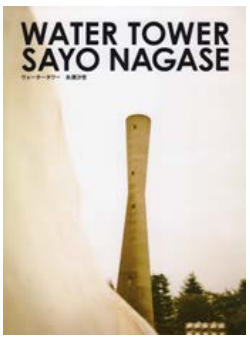
それでは、さらに相手もわからないってなりそうですね（笑）。世界中の給水塔を撮るマニアかと思えば、同じ給水塔を撮影しているんですもんね。

一方で可愛い女の子も撮ってるから、結局なにかわからないっていわれてしまいました（笑）。でも、そのときに海外に持っていったら、すごいいいといわれて。「ああ、よかった。自分のやってることは間違ってなかった」と思いましたね。こういう見方をされるんだと気付いて、このままやってていいんだと思いました。結局日本でもいいっていってくれる人も増えてきていて嬉しいです。

国内外問わず活動していくと思いますが、今後の予定を教えてください。

速い頻度で短編写真集を出したいですが、最近出した写真集『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』を手に取って頂けると嬉しいです。

1.



2.

3.

1.『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』（Yomogi Books）2014
2.『Water Tower』（Yomogi Books 刊）2011
3.『PINK LEMONADE』（スウェーデン、Libraryman）2013

永瀬沙世

1978年 兵庫県生まれ作品展、写真集の発表を日本、ヨーロッパで精力的におこない、5冊目の写真集『PINK LEMONADE』はストックホルムの出版社「LIBRARYMAN」から出版された。2014年には新作写真集『FOLLOW UP 追跡 -J002E3-』が出版され作品展も開催された。

www.nagasesayo.com